

「異なる係結が重出する文」  
からみた係結の表現価値

小田 勝

On the Double Occurrences of  
*Kakari-musubi* in a Single Sentence

Masaru Oda

要 旨

「異なる係結が重出する文」という変則的な係結構文の分析から、係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の機能を考える。その結果、係助詞「なむ」は文中の語句を強調する「プロミネンス」の機能、係助詞「ぞ」は客観的事実として同類の要素の中から一つを取り立てる機能、「こそ」は主観的意見として同類の要素の中から一つを取り立てる機能を有する、と考えられる。

Key Words

係り結び 係助詞 ぞ こそ なむ プロミネンス 取り立て

○ 本稿の目的

係結は、古典語に特有の現象として、多くの関心を集めてきたが、その本質は、なお、明らかではない。ふつう「強調」と説明されている。

1 a 花ぞ咲く。

b 花なむ咲く。

c 花こそ咲く。

間に、どのような表現価値の差があるのかについても、用例数が膨大なこともあって、明らかにするのは至難である。そこで、従来の研究は、会話文中に多用されるか否か、結びがどのような語になりやすいかといった統計的な調査から、三者の表現価値の差を明かそうと努めてきた。しかし、そのような分析から、例えば、

なむ は語る強調、ぞ は写す強調である(宮坂和江(一九五二))

「なむ」が伝承的・客観的に語る語であるのに対して、「こそ」がむ

しる強調的・主観的に自己を表白する語(此島正年(一九七三)三頁)

のように抽象化してみても、なお、三者の「強調」といわれる機能が、体系的にどのように分担されているのか、見えてこないように思われる。膨大な用例を統計的に処理し、一気に抽象化するよりも、各係助詞の機能が色濃く反映されていると思われる少数の实例から、表現価値の差をつかみとることはできないだろうか。

本稿の筆者は、前に、「結びの流れ」という周辺の現象(源氏物語で結びが流れるのは全係結中の約1割である)に、かえて各係結の表現価値の差が反映していることを指摘した(小田勝(二〇〇三))。本稿は、「異なる係結が重出する文」という、変則的な係結構文に注目し、そこ

から、係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の表現価値の差を考えようとするとのである。

一 異なる係結が重出する文

2 かくてその月二十日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御裳着のことありて、又の日なむ大将参り給ひける。(源氏物語・宿木・第⑤冊三〇八頁14行)<sup>2</sup>

3 院の内侍のかみこそ、今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。(梅枝・③三三一 13)

のように、一文中に異なる係助詞による係結が重出する文を、「異なる係結が重出する文」と呼ぶ。一文中に係結が二回現われるので、最初の係助詞に対する結びは、当然に所謂「流れ」を起こす。

右のような「異なる係結が重出する文」は、係結の中では、かなり変則的な構文である。『源氏物語』中、「ぞ」「なむ」「こそ」の係結は全部で三六三例あるが、そのうち係結が一文中に重出する例は二一六例(3%)であり、その一一六例も八四例(72%)までが、

4 御子は、故北の方の御腹にも二人のみぞおはしければ、さうさうして、神仏に祈りて、今の腹にぞ男君一人まつけ給へる。(紅梅・④三六七 10)

5 「和琴八」あづまとこそ名も立ちくだりたるやうなれど、御前の御遊びにも、まつ書司を召すは、人の国は知らず、ここにはこれ(=和琴)を物の親としたるにこそあめれ。(常夏・③七六 7)

のように、同種の係結が重出した文である。2・3のように異なる係結が重出するのは、わずかに三三例、全係結中の1%にも満たない。2の

文では「ぞ」と「なむ」の係助詞が重出しているが、これも、例えば、

2 b かくてその月二十日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御裳着のことありて、又の日ぞ大将参り給ひける。

c かくてその月二十日あまりの程になむ、藤壺の宮の御裳着のことありて、又の日なむ大将参り給ひける。

のように、同種の係結が現われる構文の方が圧倒的に普通なのである。では、なぜ「その月二十日あまりの程に」には係助詞「ぞ」が付き、「又の日」には「なむ」が用いられているのだろうか。

二 「ぞ」と「なむ」の組み合わせ

係助詞「ぞ」と「なむ」が重出した例は、源氏物語中八例(用例3~10)みえるが、両者の表現価値の差は明瞭であるように思われる。

3 右の大殿の北の方(=玉鬘)も、この君(=柏木)をのみぞ、睦まじきものに思ひ聞え給ひければ、よろづ思ひ嘆き給ひて、御祈りなど取り分きてせさせ給ひけれど、止む薬ならねば、かひなきわざになむありける。女宮(=女二宮)にも、遂にえ対面し聞え給はで、泡の消え入るやうにて亡せ給ひぬ。地(=柏木)一四九 10)

右例で、「ぞ」が付いているのは、「この君をのみ」「なむ」が付いているのは、「かひなきわざなりけり」である。「ぞ」「なむ」の付いた「この君」は、玉鬘が「睦まじきもの」に思ったのは他の誰々ではなく、「この君」だと、様々な人物(同類の要素)の中から、排他的に取り立てられたものである。一方、「なむ」の付いた「かひなきわざなりけり」は、他の様々な「わざ」の中から「かひなきわざ」が選ばれた、というよりも、「何の役にもたないことであった」という事態そのものが強調されている。

わば大声で叫ばれている」と考えられる。

4 この二年ばかりぞかくて(＝空蟬八父ノ妻ニナツテ)物し侍れど、親のおきてにたがへりと思ひ嘆きて、心ゆかぬやうになむ聞き給ふる。紀伊守詞(帚木・①八四・8)

右例でも、「この二年」は、色々な時の中から特に「この二年」として取り立てられたものであり、一方「不満に思っているように聞いておりませす」という事柄は強調された(いわばそこだけ大声で叫ばれた)ものである。この場合、色々な聞く内容の中から「心ゆかぬやうに」が他を排して取り立てられたと考えることはできないだろう。同類の要素の中から他を排して一つを取り立てる機能を「取り立て」、文中のある語句を強調する(いわばその部分だけ大声で言つと同様な)機能を「プロミネンス」と呼べば、まさに「ぞ」の機能は前者、「なむ」の機能は後者に当たると考えられる。

5 女三宮の御事を、「朱雀院ガ」いと捨てがたげに思して、しかしかなむ宣はせつけしかば、心苦しくて、え聞えいなびずなりにしを、事々しくぞ人は言ひなさむかし。源氏詞(若菜上・③三〇四・10)

右例では「なむ」によって「しかしか」と仰せになったことが強調され、「ぞ」によって、人の言いなし方も色々あるが、きつと大げさに言いなすだろうと、様々な事態の中から「事々しく」が取り立てられている。

6 春宮にも、かかる事ども(＝朱雀院ノ女三宮へノ婿選ビヲ)聞こし召して、「……」となむ、わざとの御消息にはあらねど、御気色ありけるを、「朱雀院ガ」待ち聞かせ給ひても、「朱雀院ハ」げにさる事なり。いとよく思し宣はせたり」と、いよいよ御心だたせ給ひて(＝乗り気ニオナリニナツテ)まつかの弁(＝左中弁)してぞかつがつ「源氏ニ」案内伝へ聞えさせ給ひける。地(若菜上・③二九

三・5)

右例では、消息の内容が強調され、「かの弁して(＝あの弁を仲介役として)」ということが、他の事態から排他的に取り立てられている。

7 背き給ひにし上の御心向けも、「出家ナサツタ朱雀院ノ思召モ」ただかくなむ御心隔て聞えず、まだいはけなきなき「女三宮ノ」御有様をも、はぐくみ奉らせ給ふべくぞ侍るめりし。うちうちにもさなむ「アナタ(＝紫上)ヲ」頼み聞こえさせ給ひし。女三宮ノ乳母詞(若菜上・③三三九・14)

右例では、「ただかく(＝ただこのように)」ということが強調され、紫上にしてもらいたい行動として「はぐくみ奉る(＝女三宮をお育て申し上げる)」ことが他の行動から排他的に取り立てられている。

「なむ」が付いた語に、同類の他要素の存在が想定しうる例がある。  
8 宮(＝女三宮)はもとより琴の御事をなむ習ひ給ひけるを、いと若くて院にも引き分かれ奉り給ひにしかば「朱雀院ハ」覚束なく思して、「……」と、「しりごと」に聞え給ひけるを、うちにも聞召して、「……」など宣はせけるを、おとどの君(＝源氏)も伝へ聞き給ひて、「……」と、「源氏ハ女三宮ヲ」いとほしく思して、此頃ぞ御心とどめて教え聞え給ふ。地(若菜下・④二五・11)

のような例であるが、この場合、女三宮の習っているものが他ならぬ「琴」であるということが問題とされているわけではない。「琴の御事」は、他の習い事ではなく、「琴」なのだという排他的な取り立てではなく、女三宮がもとも琴を習っている「ということ」に強調(プロミネンス)が置かれていてと考えてよいと思われる。「ぞ」の付いた「此頃」が、「他の時は違ったが特に此頃は」と、他の時から「此頃」が排他的に取り立てられているのと比べても、その差は明瞭だろう。

9 この年頃領する人も物し給はず、あやしき敷になりにて侍れば、「私八」下屋にぞ<sup>レ</sup>續ひて宿り侍るを、この春の頃より、内の大殿（＝源氏）の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたりなむいと人げさわがしうなりにて侍る。預かり詞（松風・②二〇七 1）

右例も、「下屋」が他の様々な場所から排他的に取り立てられ、この近辺が騒々しいということに強調（プロミネンス）が置かれていると思われる。以上をふまえれば、前節に示した、

10 かくてその月二十日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御装着のことありて、又の日なむ<sup>レ</sup>大将（＝薰）「女二宮方二」参り給ひける。地（宿木・⑤三〇八 14）（＝2）

は、「ぞ」の付いた「その月二十日あまり」が様々な月日の中から取り立てられ、「その翌日に大将が参上なされた」ことに強調が置かれている、と解釈されよう。実は、右例のように、「その月二十日あまり」のような客観的事柄の説明として、ある項が取り立てられる、というのが、「ぞ」の中心的な機能とされるのである。このことについては次節に示したい。

以上、係助詞「ぞ」「なむ」重出例から、「ぞ」は同類の要素の中から他を排して取り立てられた成分に付き、「なむ」は文中で強調の置かれる成分に付き、すなわち、

「ぞ」は、同類の要素の中から他を排して一つを取り立てる「取り立て」の機能、

「なむ」は、文中のある語句を強調する（いわばその部分だけ大声で言つと同様な）「プロミネンス」の機能を有すると考えられるのである。

### 三 「こそ」と「なむ」の組み合わせ

係助詞「こそ」と「なむ」が重出した例は、源氏物語中一八例（用例11～28）みえる。係助詞「こそ」の機能は、左のような用例に明瞭であるように思われる。

11 源中納言（＝薰）兵部卿の宮（＝匂宮）へ、何事にも昔の人に劣るまじう、いと契り殊に物し給ふ人々にて、遊びの方は取り分きて心とどめ給へるを、手づかひすこしなよびたる撥音なむ、おとど（＝夕霧）には及び給はずと思ひ給ふるを、この（＝あなたノ）御琴の音こそ「夕霧二」とよく覚え給へれ。按察大納言（真木柱の夫）詞（紅梅・三三三 5）

12 齋宮をも、このみこたちのつらになむ思へば、いつかたにつけても、「六条御息所二対シテ」あるかならざらむこそよからめ。桐壺帝詞（葵・三三四 7）

右例で、「こそ」の付いた、「この御琴の音」（11）、「あるかならざらむ」（＝粗略にしないこと）（12）は、夕霧の琴の音に似ているもの、よいと思われることの最上位のもの（こと）として取り立てられている。取り立てるという点では、「ぞ」と同様と思われるが、「ぞ」が客観的・説明的に同類の中から一つを取り立てるのに対し、「こそ」は主観的に最上位のものとして同類の中から一つを取り立てる、という違いがあるように思われる。前節にみたように、「ぞ」による取り立ては、客観的・説明的なものであった。

・ 右の大殿の北の方も、この君をのみぞ、睦まじきものに思ひ聞え給ひければ、（3）

・ この二年ばかりぞかくて物し侍れど、（4）

・まづかの弁してぞかつが「源氏二」案内伝へ聞えさせ給ひける。  
(6)

・此頃ぞ御心とどめて教え聞え給ふ。(8)

・この年頃領する人も物し給はず、あやしき數になりにて侍れば「私  
八」下屋にぞ繕ひて宿り侍るを、(9)

・かくてその月二十日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御衣着のことあり  
て、(10)

右のように取り立てられた項は、いずれも客観的事態(すなわち事実)への言及である。一方、「こそ」の場合は、

・この(=あなたノ)御琴の音こそ、「左大臣二」いとよく覚え給へれ。  
(11)

・いつかたにつけても、おろかならざらむこそよからめ。(12)

のように、意見として最上位と思われるものが提示されている。やや乱暴であるが、現代語で、

私が読んでいるのはAやBではなくCだ。

というとき、古典語では、

われ、Cをぞ読む。

が最も当たり、

AやBではなくCをしたのがもつとも良かったことだ。

のようなとき、

Cせしこそよからめ。

が最も当たるだろう。右のように、

「ぞ」は、事実として、同類の中から一つを取り立てる

「こそ」は、意見として、同類の中から一つを取り立てる

と考えることは、従来諸家によって提出されている、

・たとへば、石と玉とを持たるを混へ置きながらは、「それぞ玉よ」と教ふるなり。(富士谷成章(一七七八))

・ゾは単に新情報として描写に使われるだけでなく、上からの教示に使われ、新事実を強調する気配の濃い助詞である。(大野晋(一九九三))

・「こそ」は「モノ・コトを最上位のものとして、他の対象を排してとりたてる(森野崇(一九八八))

・「こそ」は、むしろ、自己の判断を強調するに急である。(阪倉篤義(一九九三))

などの説明とも符合する。

13 世の憂きよりは(=「山里は物の淋しき事こそあれ世の憂きよりは

は住みよかりけり」古今)など人は言ひしをも、さやうに「山里ノ淋シサト世ノ憂サトヲ」思ひくらぶる心も、殊になくて年頃は過ぐ

し侍りしを、今なむ「宇治ノ山里ニ帰ツテ」なほいかで静かなるさまにても過ぐさまほしく思ひ給ふるを、さすがに心にもかなはざめ

れば、弁の尼こそ羨ましく侍れ。中君詞(宿木・⑤二三九 4)

右例では「今や」と静かなところで過ごしたく思う」という事柄が「なむ」によって強調され、「弁の尼」が羨ましい対象として取り立てられている。

14 かく今はの夕べ近き末に、いみじき事の閉ぢめを見つるに(=死

二直面シタ今ニナツテ、悲シイ紫上ノ最期ヲ見テ)、宿世の程もみづ

からの心の際も、残りなく見果てて心やすきに、今なむ露のほだし

なくなりにたるを、これかれかくて、「紫上ノ」ありしよりけに目馴らす人々の、今はとて行き別れむ程こそ、今一きは心乱れぬべけれ。源氏詞(幻・④三三五 2)

- 15 なほこの近き夢(＝大君逝去ノ事)こそ、さますべき方なく思ひ  
給へらるるは、同じごと世の常なき悲しびなれど、罪深きかたはま  
さりて侍るにやと、それさへなむ心憂く侍る。 薫詞(宿木・⑤二  
三八 8)
- 16 なにがし、延喜の「帝ノ」御手より弾き伝へたる事三代になむな  
り侍りぬるを、かう拙き(＝明石流謫ノヨウナ不遇ノ)身にて、こ  
の世の事は捨て忘れ侍りぬるを、物の切にいぶせき折々は、掻き鳴  
らし侍りぬるを、あやしうまねぶもの(＝明石上)の侍るこそ、自  
然にかの前大王の御手に通ひて侍れ。 源氏詞(明石・②七四 10)
- 17 院(＝冷泉院)は、げに御位を去らせ給へるにこそ盛り過ぎたる  
心地すれど、世にありがたき「院ノ」御有様は、ふりがたく(＝イ  
ツマデモ才若ク)のみおはしますめるを「私二」よろしう生ひ出づ  
る女子侍らましかば「院二差シ上ゲタイ」と思ひ給へ寄りながら、  
恥ずかしげなる御なかに(＝院ノ後宮二)まじらふべきもの(＝私  
ノ娘)の侍らでなむ口惜しう思ふ給へらるる。 夕霧詞(竹河・④  
三九〇 1)
- 18 とある事もかかる事も、前の世の報いにこそ侍るなれば、言ひも  
てゆけば、ただみづからの念りになむ侍る。 源氏詞(須磨・②五  
3)
- 右例では、「こそ」の付いた語が、それぞれ、心が乱れるもの(14)覚  
ますことができないもの(15)、前大王の弾き方に似ているもの(16)、  
盛りの過ぎた気持ちができるもの(17)、現況を引き起こしたもの(18)の  
最上位のものとして、取り立てられている。
- 19 我はかく人に憎まれてもならぬを、憎マレタ経験モナイノ二、  
今宵なむ、はじめて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥ずかしうて、な  
がらふまじくこそ思ひなりぬれ。 源氏詞(空蝉・①九三 2)
- 20 「六条御息所ガ私(＝源氏)ヲ恨ンダママ死ンダコトガ」ながき  
世のうれはしきふしと思ひ給へられしを「アナタ(＝秋好中宮)ヲ」  
かうまでも仕うまつり御覽せらるるをなむ慰めに思ふ給へなせど、  
燃えし煙(＝源氏二対スル恨ミ)のむすほられ給ひけむは、なほい  
ぶせうこそ思ひ給へらるれ。 源氏詞(薄雲・②二六一 3)
- 右例19・20は思ふ内容として極端なものが取り立てられている。
- 21 「八宮八」心のうちにこそ「姫君達ノ事モ」思ひ捨て給ひつらめ  
ど、明暮御かたはらにならひ給ひて、俄に別れ給はむは、つらき心  
ならねど、げに怨めしかるべき御有様になむありける。 地(椎本・  
五九 5)
- 22 いでや、「私(＝右近)ハ」身こそ数ならねど、殿(＝源氏)も  
「私ヲ」お前近く召し使はせ給へば、物の折ごとに、「玉鬘八」い  
かにならせ給ひにけむ」と「私ガ源氏二」聞えいづるを、聞召しお  
きて、「われいかで「玉鬘ヲ」尋ね聞えむと思ふを、「モシオ前ガ玉  
鬘ノ事ヲ」聞きいで奉りたらば」となむ宣はする。 右近詞(玉鬘・  
②三三三 2)
- 23 かしこ(＝紫上)には、年経ぬれど、かかる人もなきがさうぎう  
しく覚ゆるままに、前齋宮のおとなび物し給ふをだにこそ、あなが  
ちに「妹分トシテ」あつかひ聞ゆめれば、ましてかく憎みがたげな  
める程を、おろかには思ひ放つまじき心ばへになむ。 源氏詞(薄  
雲・②三三一 1)
- 右例21～23は所謂対比の用法であるが、対比とは、  
Aはaだが、非Aは、  
という表現構造であり、一方のAが極端なものとして提示されるので、

このような用法も、「こそ」の機能からすれば当然であろう。<sup>6)</sup>

24 かの御あたりの人(＝源氏ノ側近ニ任エテイタ人々)は、上下心浅き人なくなむ惑ひ侍りけるままに(＝悲嘆ニクレテイタノデ)「六条院ノ」方々つどひ物せられける人々も、皆所々にあかれ散りつつ、おのおの思ひ離るるすまひをし給ふめりしに、はかなき程の女房などは、まして心をさめむ方なく覚えけるままに、物覚えぬ心にまかせつつ、山林に行きまじり、すすろなる田舎人になりなどあはれに惑ひちるこそ多く侍りけれ。 薫詞(宿木・⑤二三七 10)

右例の「あはれに惑ひちるこそ多く侍りけれ」は客観的な事態ともいえず、よすが、「かの御あたりの人」の境遇の中で、「あはれに惑ひちる人々」が最上位のものとして提示されているとも考えられよう。残る四例は「さこそ」、「さこそ」、および文末(結びの省略)の例であるが、いずれも、以上に見た、主観的に最上位のものとして取り立てられていると考えて当たると思ふ。

25 さればこそ「姫君ヲ院ニアゲテハ」世人の心のうちも、かたぶきぬべき事なり(＝不審ニ思ウダロウ)、「と」私(＝玉鬘ノ息子)「ガ」かねて「アナタ(＝玉鬘)ニ」申しし事を「アナタハ」思し取る方異にて、かつ(＝姉君ヲ院ヘト)思し立ちにしかば、「私ハ」ともかくも聞えがたくて侍るに、「主上カラ」かかる仰言の侍るは、なにがしらが身のためも、あじぎなくなむ侍る。 中将(玉鬘の息子)詞(竹河・④四一四 10)

26 女(＝空蝉)は「源氏ガ自分ヲ」さこそ忘れ給ふを嬉しきに思ひなせど「先夜ノ」怪しく夢のやうなることを、心に離るる折なき頃にて、心とけたる寝だに寝られずなむ。 地(空蝉・①九九 12)

27 …、うち(＝冷泉院)にもさこそおとなび給ひたれど、いとときな

き御よはひにおはしますを、すこし物の心知れる人は、さぶらはれてもよくや(＝多少分別ノアル女御ガ付キ添ッテモヨカロウ)と思ひ給ふるを、「ソノ辺アアナタ(＝藤壺)ノ」御定めになむ。 源氏詞(濤標・②二四三 4)

28 …、「未摘花ノヨウナ」かばかり心細き御有様になむ、世を尽きせず思し憚るは、つきなつこそ」と「命婦ガ未摘花ニ」教え聞ゆ。 命婦詞(未摘花・①二四六 2)

以上、前節にみたことも踏まえて、

「なむ」は、文中のある語句を強調する(いわばその部分だけ大声で言つと同様な)「プロミネンス」の機能

「ぞ」は、客観的事実として、同類の要素の中から他を排して一つを取り立てる「取り立て」の機能、

「こそ」は、主観的意見として、同類の要素の中から他を排して一つを取り立てる「取り立て」の機能、

とまとめることができよう。

#### 四 「ぞ」と「こそ」の組み合わせ

「ぞ」と「こそ」が重出した例は六例みられる。

29 「六条御息所ハ」怨むべきふしぞ、けにことわりと覚ゆるふしを、やがて長く思ひつめて、深く怨せられしこそ、いと苦しかりしか。

源氏詞(若菜下・④五一 4)

右は、やや構文がつかみにくい例であるが、「怨むべきふしぞ」は「やがて長く思ひつめて」に係り、「怨まなければならぬことを、確かにこちらももつともだと思われぬことでもあるのだが、そのまま思いつめ

て、深く怨んで打ち解けなかったことが、大変苦しいことだった」くらいの意だろう。「こそ」の方は前にみたような主観的な取り立てと解釈されようが、「ぞ」の方は、同類の要素から排他的に一つを取り立てるといふより、提題の助詞化しているようにも感じられる。事実、河内本は「怨むべきふしぞ、げにことわりと覚ゆるふしを、やがて長く思ひつめて」「が、怨むべきふしは、げにやがて長く思ひつめて」となっている。この例や、後に示す32・33のように、「ぞ」と「こそ」の組み合わせの場合、最初の方が提題化していると考えられる例がある。

「ぞ」と「こそ」の組み合わせは、右29を除き、すべて、  
こそ ど (逆接) ぞ  
という句型である。

30 わざと好まじからねど、おのづから又急ぐ事なき程は、同じ心なる文通はしなともうちしてこそ、若き人は木草につけても心を慰め給ふべけれど、「未摘花八」親のもてかしづき給ひし御心おきてのまに、世の中をつつましきものに思して、稀にもことかよひ給ふべき御あたりをも、更に馴れ給はず、ふるめきたる御厨子あけて、唐守、藐姑射の刀自、かくや姫の物語の絵にかきたるをぞ、時々のみさぐり物にし給ふ。地 (蓬生・②一五二・5)

31 「女二宮ガ」一条に渡り給ふべき日、その日はかりと「夕霧八」定めて、大和守召して、「引キ移リノ」あるべき作法宣ひ、宮(一一条宮)の内払ひしつらひ、さこそいへども、女どちは草繫う住みなし給へりしを、磨きたるやうにしつらひなして、御心づかひなど、あるべき作法めでたう、壁代、御屏風、几帳、御座などまで思し寄りつつ、大和守に宣ひて、かの家(大和守ノ家)にぞ急ぎ仕うまつらせ給ふ。地 (夕霧・二七〇・6)

右二例は、前節に見たように、「ぞ」が客観的事実として、「こそ」が主観的意見として排他的に提示していると考えて当たる例である。

32 「物語ノ中デ」心浅げなる人真似どもは見るにも傍痛くこそ。宇津保の藤原の君のむすめこそ、いとおりかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すくよかに言ひいでたるしわざも、女しき所なめるぞ一様なめる(一)。「心浅げなる人真似ども」ト同様(二思ウ)。紫上詞(虫・③六三・6)

33 院の内侍のかみ(臙月夜)こそ、今の世の「筆ノ」上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。源氏詞(梅枝・③二三・一三)

右二例は最初の「こそ」の方が提題化している例である。構文の骨子を示せば、

32 b 宇津保の藤原の君の娘は、間違いを起こすようには見えないが、女らしくない点(人真似する娘たち)と同様のようだ。

33 b 臙月夜は当代の名手だが、あまり洒落すぎるといふ癖がついているようだ。

のようであり、この(現代語表現の)「は」が「こそ」で「が」が「ぞ」で示されているわけである。「ぞ」と「こそ」が重出した例が少ないこと(六例)その用例の半数(三例)が右のような一方が提題化した例であることは、「ぞ」も「こそ」も同様の「取り立て」機能を有しているという解釈を支持する現象だろう。排他的な取り立てが一文中に重出するのは情報的にやや負担が大きい表現になり、敬遠されやすいと考えられるからである。

前節の説明では解釈できない例が一例存する。  
34 「兵部卿宮ハアナタノ」御おとうとにこそ物し給へど、ねびまさ



りてぞ見え給ひける。花散里詞（螢・③五六 5）  
 「弟だ」というのは客観的事実であり、大人びて見える」のは主観的意見だろう。実際、右では「ねびまさりて」が「ぞ」によって取り立てられているが、その直後の文では、

・「兵部卿宮八」いとよくこそかたちなどねびまさり給ひにけれ。

と「こそ」が用いられている。34で「こそ」「ぞ」が右のように用いられた理由はわからないが、いくつかの理由が想定される。

- 一 34は花散里の源氏に対する発言で、相手側（源氏側）に属する知識（兵部卿宮が源氏の弟であること）を花散里（話し手）が源氏に教示するのは不適當であるから、教示・説明に用いられる「ぞ」が避けられ、自分の意見として示される「こそ」が用いられた。
- 二 『源氏物語』中、「ぞ」と（逆接）「こそ」の句型は存在せず、したがって、  
 ・御おとつとにぞ物し給へどねびまさりてこそ見え給ひけれ。  
 はかなり不自然な句型である。

- 三 御物本、阿里莫本の「ねびまさりて」と「ぞ」が無い本文を採るべきである。

おそらく一のような情報論的な理由<sup>(9)</sup>、二のような逆接句内の「こそ」の親近性によって、34のように表現されたのではなからうか。

## 五 結 論

以上、異なる係結が重出する文<sup>(10)</sup>から、各係結の表現価値の差について考えた。付属語の機能のすべてが一つの意義として説明できるとは思われないが、「ぞ」「なむ」「こそ」の中核的な機能はおよそ次のようであ

ると考えられる。

- 一 同類の要素の中から他を排して一つを取り立てる機能を「取り立て」文中のある語句を強調する（いわばその部分だけ大声で言うのと同様な）機能を「プロミネンス」と呼ぶ。
- 二 「なむ」は、文中の語句を強調する「プロミネンス」の機能を有する。
- 三 「ぞ」「こそ」は、同類の要素の中から他を排して一つを取り立てる「取り立て」の機能を有する。
- 四 「ぞ」は客観的事実として同類の要素の中から一つを取り立てる。「こそ」は主観的意見として同類の要素の中から一つを取り立てる。

用例34にみるような情報論的制約などについては、今後、会話文の分析などを通じて考えていきたい。

## 注

- (1) 例えば『ベネッセ古語辞典』では「ぞ」「こそ」の付いた成分を強く指示し、叙述を強調する。「なむ」は『なむ』の付いた成分を強く指示し、叙述を強調する。「こそ」は、その成分を取り立てて指示し強調する」と説明されている。
- (2) 以下、所在は、⑤三〇八<sup>14</sup>のように示す。テキストは吉沢義則『対光源氏物語新釈』（平凡社）による。
- (3) 以下、用例が地の文の場合は「地」、会話文の場合は「源氏詞」（＝光源氏の会話中の文の意）のように示す。
- (4) この場合は「かひなきわざなりけり」という述語内に係助詞「なむ」が介在している（中村幸弘（一九七九）、中村幸弘（一九八一））。
- (5) 「この君をのみ」の素材的意味の部分の問題にする。以下同じ。
- (6) なお、歴史的には、逆に、逆接句の中で生まれたと考えられる「こそ」已然形

が、その対比性のゆえに、最上位のものを意見として取り立てる機能に発達したと考えられる。

(7) 例えは「彼は漫画しか読まないが、文学全集までも持っている」のような文は決して不可能ではないが、情報量的に負担の大きい表現になり、敬遠されやすいだろう。

(8) 『源氏物語大成 校異篇』による。

(9) 情報が話し手側に属するか、聞き手に属するかで表現が異なるという現象が観察される(神尾昭雄(一九九〇)など)。

#### 引用文献

- 大野晋 (一九九三) 『係り結びの研究』 岩波書店  
 小田勝 (二〇〇三) 「結びの流れ」からみた係結の表現価値、『国語研究』66号  
 神尾昭雄 (一九九〇) 『情報のなわ張り理論』大修館書店  
 此島正年 (一九七三) 『国語助詞の研究』桜楓社  
 阪倉篤義 (一九九三) 『日本語表現の流れ』岩波書店  
 中村幸弘 (一九七九) 「補助動詞「あり」小論」田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢(桜楓社)所収  
 (一九八一) 「係結の構文論的取り扱い」『文教大国文』10号  
 富士谷成章 (一九七八) 『あゆひ抄』(中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』による)  
 宮坂和江 (一九五二) 「係結の表現価値」『国語と国文学』昭和27年3月号  
 森野崇 (一九八八) 「係助詞「こそ」の機能」『学術研究 国語・国文学』37号